

SFRR Japan NEWSLETTER January 1, 2014



Top News

2014年 午年



年頭のご挨拶

理事長 小澤 俊彦

(横浜薬科大学教授)



新年を迎え、会員の皆様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。日本酸化ストレス学会が新たな学会として発足してから、7年が経過し、学会としても十分に定着し、広く認知されたものと確信しております。私も理事長として3年間無難に任務を努めることができました。これもひとえに会員各位の日頃よりの様々なご協力、ご尽力の賜物であると心より感謝申し上げます。今年は理事長として最後の1年を務めさせていただきますので、会員の皆様のさらなるご協力、ご支援を頂きたいと心よりお願い申し上げます。

2011年3月11日の東日本大震災からすでに3年がたとうとしますが、現在も会員諸氏におかれましては極めて厳しい研究環境になられている方もおられると思います。心よりお見舞い申し上げますと共に速やかな回復を祈念致しております。

このような状況下で、本学会の登録会員数も950名を越えまして、大変順調に組織化が進んでおり、会員各位の酸化ストレス学研究への関心の深さを感じておりますが、更に一層会員の増加をはかりたく、会員数1000名を越すことを今年度中に達成したく関係各位に会員獲得をお願いする次第です。特に、若手研究者の増加が新しい発想と柔軟な考えが研究の発展と拡大につながるものと考えております。是非ともこの点を考慮していただき会員増加につなげていければと願っております。

一方、本学会のOfficial Journalである"Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition (JCBN)"は更にインパクトファクターが上昇しまして、国際誌の仲間入りを果たしつつあります。これも会員各位のご協力の賜物と深謝いたしております。更により一層の上昇を目指すうえで、会員各位が国際的な視野を広げられ、JCBNに多くの投稿をされることを期待しております。最後になりますが本年3月には日本酸化ストレス学会が中心となった国際フリーラジカル会議(SFRR)が京都で開催されますので、会員諸氏におかれましては積極的に本会議に出席され、国内外の最新の知識を得ていただきたいと思う次第です。

以上が、新年を迎えるにあたっての私の思いであります。最後になりましたが、本年も会員各位におかれましては健康と安全に十分に留意され、益々活躍されることを祈念しております。

New! *** 役員新任報告 ***

2013年度役員会にて、新しい役員が下記の通り選出されました。

新名誉会員：浦野四郎、川西正祐、嵯峨井勝、桑原幹典
 新功労会員：佐藤和恵、佐野満昭、尾形建明
 新監事：岡田 茂 (内海先生後任)
 新理事：増野匡彦、稲波 修、長崎幸夫、松浦達也(以上4名)
 新評議員：長野由美子、齋藤芳郎、井内良仁、澤 智裕(以上4名)

※役員推薦内規が設定されました。

理 事：5年以上の会員歴・当該分野の研究歴、会費完納。
 過去5年間に、JCBNを含む関係領域の発表論文が5編以上(共著可)
 過去3年間に、年次学術集会における発表が1回以上(共同演者可)
 評議員：3年以上の会員歴・当該分野の研究歴、会費完納。
 過去5年間に、JCBNを含む関係領域の発表論文が5編以上(共著可)
 過去3年間に、年次学術集会における発表が3回以上(共同演者可)
 などを基本とし、いずれも、特に理事会が必要と認めたものを設定。

推薦者は、理事は理事2名以上の連名、評議員は理事1名以上もしくは評議員2名以上とする。

現行の役員についても、連続して3回欠席した場合は再任を認めないとする。

◇◇◇ 年次学術集会案内 ◇◇◇

第67回日本酸化ストレス学会学術集会

日 時：2014(平成26)年9月4日(木)～5日(金)

会 場：同志社大学良心館

(京都駅から地下鉄5駅今出川駅下車徒歩1分)

〒602-8580 京都府京都市上京区今出川通烏丸東入

<http://www.doshisha.ac.jp/information/campus/buildings/imadegawa.html>

会 長：野口 範子

(同志社大学生命医科学研究科・システム生命科学研究室・教授)



開催のご挨拶



3月に京都で開催されますSFRRに続き、同じく京都にて第67回日本酸化ストレス学術集会を開催させていただきます。昨年のNEWSLETTERに掲載されました本会の会場を変更し、同志社大学において開催する準備をすすめております。

特別講演とそれに続くシンポジウム「テーマ」を下記の内容で準備しております。I:水島昇(東京大学医学部分子生物学)「Cell Death & Survival」、II:高橋和利(京都大学iPS細胞研究所)「iPS細胞と再生医療の近未来」、III:小林久隆(アメリカ国立がん研究所)「網羅的解析と分子イメージング」、学会賞講演:馬嶋秀行、学術賞講演:永井竜児・半田修。尚、特別講演を含め講演タイトル等は随時HPにアップする予定です。本会でのディスカッションの中から酸化ストレス学の新しい展開が起こることを祈念して、多くのご参加をお待ち申し上げます。

SFRR International 2014

準備状況報告

プログラム委員長・Chair 豊國 伸哉(名古屋大学)



会員の皆様、あけましておめでとうございます。この度、京都での開催が3度目となりますBiennial Meeting of the Society for Free Radical International (SFRR2014)を内藤裕二先生と二人で3月末に主催させていただきますことを大変光栄に思います。

プログラム委員会と事務局の奮闘により現在準備状況は順調であり、登録は500名に迫ろうかというところ です。

今回の見所は、フリーラジカル・酸化ストレス領域の最前線を網羅した20のシンポジウムであり、タンパク質ニトロ化、放射線影響、NADPH oxidase、がん幹細胞に関する4つのPlenary lecture(こなるうかと思えます)。そのほかにも、多彩なMeet the professorセッション(ランチョンセミナー)、それから日本とも縁深いHelmut Sies博士によるTrevor Slater award lectureもあります。今回のSFRRにおいては、生体におけるフリーラジカル反応や酸化ストレスの解析が一層進んだために、ヒトへの現実的な応用を目指した演題が増えているのが特徴です。工学・理学領域では最先端のナノマテリアルやプラズマまで登場します。

学生やポスドクのみならずのためには、本領域の初歩を学ぶSunriseセミナーやエルゼビア本社スタッフによる論文の書き方を勉強するワークショップも用意しました。若手を対象とした賞も沢山準備しておりますので、発表を楽しみにしておいてください。さらに若手のSocial programとして、3月25日(火)の夜には各国の若手が参加する居酒屋パーティーも企画しております(1000円)。初日の午前・午後には、多彩なサテライト・シンポジウムもあります。是非、SFRR2014のホームページでプログラムをご確認ください。

アジアの一員として、日本の研究者は本領域を牽引していく必要があります。一人でも多くの会員の方が本会に参加され、国内外の研究者と交流を深め、ご自身の研究を発展されることを心より祈念します。末筆ではございますが、本年が会員の皆様にとりまして最良の年になりますことをお祈りいたします。



～ 2013年度 各賞受賞者 喜びの声 ～

第66回学術集会(2013年6月 名古屋開催)において、選考委員会による厳正な審査を経て、理事会・評議員会の承認の下、下記受賞が決定いたしました。受賞者の皆様の今後の益々のご活躍を祈念いたします。



「2013年度 学会賞 を受賞して」

馬嶋 秀行 (鹿児島大学 教授)

この度、2013年度日本酸化ストレス学会賞という栄誉ある賞をいただきまして、光栄に存じますと共に、大変感謝いたします。小澤俊彦理事長、桑原幹典選考委員長、他関係者の皆様に深謝いたします。

私は、日本大学歯学部を卒業後、放射線医学総合研究所(放医研)に研究生としてまいり、細胞、マウス腫瘍を用いた陽子線および中性子線の研究を開始いたしました。当時は、細胞培養も研究の最先端の手法であり、また、ちょうど陽子線治療を立ち上げるところでもありました。運良く、当時とても高価なCTが放医研に入りましたので、そのCTを用いて治療計画を立て、放射線治療を行なうことに世界で初めて成功いたしました。その後、アメリカハーバード大学マサチューセッツ総合病院(MGH)に1年間行かせていただき、温熱療法の研究を開始いたしました。わずか1年でしたが、初めての海外生活というかけがえのない経験をさせていただきました。帰国後、東京大学医学部放射線基礎医学教室の助手として、放射線腫瘍学、すなわち癌をどうやったら治せるかという研究の道へと進んでいきましたが、なかなか治癒率の進歩までいきつきませんでした。そんな中、ケンタッキー大学のマンガンスーパーオキシドディスムターゼ(MnSOD)のパイオニアである Daret K. St. Clair 先生のラボに留学する機会に恵まれました。MnSODはミトコンドリアに局在するSODですが、MnSOD遺伝子を過剰発現することにより、ミトコンドリアから発生するスーパーオキシドが細胞死、アポトーシスと関連することを世界で最初に発表することができました(Majima et al., J Biol Chem, 1998)。その後、放医研に戻り、放射線誘導アポトーシスでも核DNAではなく、ミトコンドリア発生スーパーオキシドがアポトーシスと関連することを見いだしました(Motoori et al., Cancer Res, 2001)。このように、最初はアメリカで開始した酸化ストレス、ミトコンドリアの研究ですが、その後放医研に戻ってからも継続して行なうことができましたのも、当時、現理事長の小澤先生が放医研におられ、多いに助けていただき、また支援していただいたおかげだと思っております。その後、2001年に鹿児島大学に赴任し、はや12年の歳月が経過いたしました。放射線の研究では、MnSODが放射線誘導アポトーシスを抑制するには、ミトコンドリアに局在することが必須であることを報告いたしました(Indo et al. Free Rad Res, 2012)。本賞はとても権威のある賞であり、今回受賞できましたのも、これまでたくさんの先輩方からの温かいお言葉や、時には厳しいお言葉、また同僚や後輩達の支えがあったからだに深く感謝しております。今後ともこれまで同様、酸化ストレス研究、酸化ストレス学会の発展に貢献していきたいと考えております。今後とも何卒よろしくお願いたします。



「2013年 学術賞 を受賞して」

半田 修 (京都府立医科大学 消化器内科)

このたびは伝統ある日本酸化ストレス学会で学術賞を頂きまして誠にありがとうございます。

私の酸化ストレス研究は、15年近く前にRGM1勉強会というマニアな研究会の演題づくりのためにおこなった研究をもとにして、「サイトカイン産生が酸化ストレスを介したシグナルでおこる」という論文を書いたことから始まりました。それ以来、酸化ストレスの研究をおこなってきましたが、今回は社会の高齢化に伴いその使用量が著増している非ステロイド性抗炎症薬(NSAID)が消化管粘膜に傷害をおこす副作用のメカニズムを探ることにより、その予防や治療に役立てようとする研究で受賞させていただきました。非特異的であると考えられていた酸化ストレスが、特異的に生体内分子を修飾し、シグナル伝達をコントロールしている事を明らかにしていくことが我々の使命であると思っております。

この受賞に勇気づけられ、今後とも人類の消化管を守る研究を酸化ストレスの観点から続けていこうと、決意を新たにしております。

末筆になりましたが、私の研究を全面的にご指導いただきました吉川敏一名誉理事長、小澤俊彦理事長、内藤裕二副理事長をはじめとする日本酸化ストレス学会の会員の皆様、ならびに私を支えて下さる教室の同僚、若い先生がたに深謝申し上げます。このたびは、誠にありがとうございます。今後ともご指導のほどよろしくお願申し上げます。



永井 竜児 (東海大学農学部バイオサイエンス学科)

この度は2013年度日本酸化ストレス学会・学術賞という大変栄誉ある賞を頂きまして、心よりお礼申し上げます。私は2005年頃に本学会を知り、フリーラジカルのごとくふらっと単身参加させて頂きました。面白い話題が多く、その後は変更不可能な学内業務が入らない限り毎年年会に参加させて頂いております。ほとんど知り合いない学会でしたが、今では学会を通じて多くの方々と知り合いになることができました。2006年に開催された第28回年会では、「抗酸化剤の有効性と安全性」というシンポジウムが企画され、抗酸化ポリフェノールとして有名な緑茶カテキンも、条件によっては逆に酸化反応を促進する場合がありますが議論されておりました。これは当時、酸化依存性のメイラード反応後期生成物(AGEs)であるN^ε-(carboxymethyl)lysine (CML)が、ポリフェノールによって逆に生成が促進してしまう謎を解きかけとなり、後にカテコール骨格を有する化合物は1mM以上の高濃度で存在すると、過酸化水素の産生を介してCML生成を促進する現象の解明につながりました(Fujiwara Y et al., Free Radic Biol Med. 2011)。また、脂肪細胞でTCA回路の代謝異常から過剰産生されたフマル酸がチオール基と反応し、新規翻訳後構造であるS-(2-succinyl)cystein (2SC)が生成されることを報告させて頂きましたが(Nagai R et al., J Biol Chem. 2007)、2SC測定が細胞内NAD⁺/NADH比やミトコンドリアストレスのマーカーとなる可能性を本年度のシンポジウムで紹介させて頂く機会を頂き、大変感謝しております。これからも本学会で様々な情報を集め、さらに有益な情報を発信できるような精進したいと思いますので、今後ともよろしくお願もうしあげます。

☆学会賞・学術賞の受賞者の方には、学会Official JournalでありますJCBNに論文掲載を頂きます。☆

「2013年 学術奨励賞 を受賞して」

大和真由実 (九州大学先端融合医療レドックスナビ研究拠点)

この度は、栄えある日本酸化ストレス学会学術奨励賞を頂き、大変光栄に感じております。理事長 小澤俊彦先生を始め、審査をしてくださった先生方ならびに酸化ストレス学会の諸先生方に深く感謝申し上げます。また、これまでご指導を賜りました先生方、共同研究者の皆様はこの場をお借りして御礼申し上げます。

今回は、NAD⁺/NADHの比が、代謝過程において重要な酸化還元反応を担うレドックスペアであること、またNADHが過剰になると酸化ストレスが誘発されることに着目し、ニトロキシラジカル(Tempol)のレドックス特性を肥満モデル動物に適用した成果を発表させて頂きました。まだ未解明の部分が多い研究課題ですので、酸化と還元の間を見据えつつ、研究を積み重ねていきたいと思っております。今後とも御指導、御鞭撻の程、宜しくお願申し上げます。

家田 直弥 (名古屋市立大学)

この度は、日本酸化ストレス学会学術奨励賞をいただき、大変光栄に感じております。理事長 小澤俊彦先生、第66回学術集会会長 豊國伸哉先生、選考に関わった諸先生方に深く感謝申し上げます。また、実験のご指導を賜りました、名古屋市立大学 宮田直樹教授、中川彦彦教授並びに共同研究者の皆様がこの場を借りて御礼申し上げます。

私は2010年の第63回学術集会から参加させて頂きました。今回の発表では、初参加当時から続けている光制御型パーオキシナイトライド発生剤について発表させて頂きました。今後も、酸化ストレスの研究に役立つケミカルツールや、それを用いた新たな治療法の開発を目指していきたいと考えております。本奨励賞の受賞を励みに、私の研究が酸化ストレス学の発展に貢献出来るよう、今まで以上に研鑽を積み重ね、努力していきたいと思っておりますので、今後とも変わらぬ御指導、御鞭撻の程、宜しくお願申し上げます。



(写真左から 小澤理事長/大和/家田/野口学術奨励賞選考委員長)

「八木記念学術奨励賞」を受賞して

長野由美子(筑波大学)



この度は八木記念学術奨励賞という名誉ある賞を頂き大変光栄に存じます。日本酸化ストレス学会理事長小澤俊彦先生、前理事長 吉川敏一先生、第66回日本酸化ストレス学会学術集会会長 豊國伸哉先生に並びに関係の諸先生方に御礼を申し上げます。松井裕史講師の指導の下、酸化ストレスと消化管病変について研究して参りましたが、本受賞論文研究では骨粗鬆症治療薬であるBisphosphonateによる上部消化管粘膜傷害の発生機序にはMitochondriaからの活性酸素生成を促進し、酸化ストレス的による脂質過酸化が関与していることを報告いたしました。この受賞を励みに今後さらに努力していきたいと思っておりますので御指導のほどよろしくお願い申し上げます。

◇◇◇ その他各賞受賞について ◇◇◇

関連国際学会において、本会より下記の方々Young Investigator Awardを受賞されました。

第6回SFRR Asia (2013.10.16-19 台湾)

【Informa Healthcare Prestigious Poster Award】2名

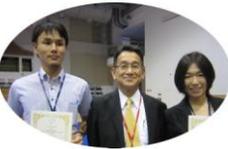
岡崎 泰昌(名古屋大学大学院医学系研究科)
安田 大輔(慶應義塾大学大学院薬学研究科)



受賞者には、賞状と副賞(学会Official Journal "Free Radical Research"1年間購読無料)が授与されました。

【日本酸化ストレス学会奨励賞】2名

岸本 俊輔(京都府立医科大学大学院医学研究科)
齋藤 梨絵(筑波大学大学院人間総合科学研究科)



その他【SFRR Taiwan Merit Award】

上原有紀子(京都府立医科大学大学院医学研究科)



第6回SFRR A+J (2013.9.12-14 シドニー・オーストラリア)

【日本酸化ストレス学会 奨励賞】5名



永瀬 翠 (東京工科大学大学院バイオ・情報メディア研究科)
岸本 俊輔 (京都府立医科大学大学院医学研究科)
喜多村 佳委 (名古屋市立大学大学院薬学研究科)
飯田 貴弥 (京都府立医科大学大学院医学研究科)
福田 亘 (京都府立医科大学大学院医学研究科)

本会では、今後も、これまでの功績を称え、また、今後の活躍を期待し、各種賞の授与を行う予定です。自薦他薦を問いませんので、是非多くのご応募・ご推薦お待ちしております。

SFRR 2014 (2014年3月/京都)では、各種YIAの授与を予定しております。

SFRR ASIAのYIA (アジアの若手会員から 6名)

- "Informa Healthcare young investigator award" 2名
"SFRR Asia Young Investigator Award" 2名
"Informa Healthcare prestigious poster award" 2名

賞状と副賞が授与されます。(UK£500,US\$500,FRR年間購読料無料等)

※発表は会期最後の閉会式の際に予定されております。

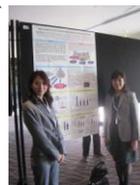
◇◇◇ 学会レポート ◇◇◇

第6回SFRR A+J2013に参加して

南山幸子(京都府立大学大学院 生命環境科学研究科)

9月12-14日にシドニーで開催されたオーストラリアとの合同会議に参加した。私はシドニーを訪れるのは過去の本会参加やSFRR-Iを含め数度目であった。シドニーを含むニューサウスウェールズ州はオペラハウスやグレーター・ブルーマウンテンズなどのユネスコ世界遺産のあるすばらしい景観が望める場所であり、私も好きな場所である。今回は研究室の岡真優子准教授と修士の学生二人と参加することができ、美味しいシーフードもまた格別の味わいであった。過去に行われた本会はシドニー大学構内で行われることが多かったが、今回はシドニー中心部のホテルで第8回international human peroxidase meetingに引き続き開催された。口演55題、ポスター59題が発表され、活発な議論が交わされた。Peroxidaseの会の続きであったせいか、myeloperoxidaseやperoxiredoxinsなどペルオキシダーゼに関する発表が多かったような印象を受けた。

バンケットでは若手奨励賞(YIA)が発表され、5名の若手研究者が受賞された。2015年はニュージランドで開催されるとのことである。今後益々、日本とオーストラリアのフリーラジカル研究者がこの分野での研究を世界に発信する中核になるよう頑張っていきたいと思っている。



第6回SFRR Asiaに参加して

福井浩二(芝浦工業大学システム理工学部生命科学科)

10月16-19日まで台北のChang Gung Universityにおいて6th SFRR-Asiaが行われました。私は16日に台北入りしたのですが、運悪くこの日の午前中は台風26号が関東を直撃した日であり、山手線と京浜東北線が止まるなど首都圏の交通機関が大混乱する中、タクシーを奪い合うように拾い、何とか羽田空港に辿り着くことができました。当初は欠航もやむなしと考えましたが、飛行機は2時間30分遅れで何とか離陸、無事に台北に着くことができました。学会が行われたChang Gung Universityは、台北郊外の林口地区にありました。私は予算の都合上、市内の安宿を予約していましたので、学会会場へは毎日約30分路線バスを使って通いました(場所が場所だけに缶詰となり、期間中はみっちり勉強しました)。大学内ではSFRR-Asiaののぼりや大看板、バルーンなどが至る所にあり、学会開催を盛り上げていました。初日夜のWelcome receptionは外で行われ、学生の方々の生演奏を聴きながら、台湾料理を味わい各国の方々との親交を深めました。学会では、台湾、中国、韓国、日本などアジアからの参加者が多いのは当然ですが、欧米からも多くの参加があり、シンガポールのB. Halliwell先生やオーストラリアのM. Davies先生、アメリカのCK. Sen先生らの講演を拝聴しました。勿論、二木先生ら多数の日本の先生の講演も拝聴しました。口頭発表は、今回の学会のサブタイトルにも含まれるようにミトコンドリアに関する発表が多かったように思います。また、先月にオーストラリアとのJoint Meetingが行われた後のすぐの開催だったせいか、日本人の参加者が少ないように感じました。最終日の夕方には、Young Investigator Awardをはじめとする各賞の発表が行われました。その後の懇親会は何と大学の体育館で行われ、円卓を囲みながら豪華な台湾料理を食べることができました(私はその後、学会で一緒になった先生方と二次会でだいぶ飲んでしまい、帰りの飛行機は食事もとらず熟睡していました)。

台北は街中に日本にもなじみのある店が多く、街の方々もとても親切なため、日本にいるかのような錯覚さえ感じます。学会を通じて、主催のRong-Liang Zheng先生をはじめ、Chang Gung Universityの学生スタッフのHospitalityにとても感激しました。参加者の一人として、この場を借りて感謝申し上げます。来年3月には京都でSFRRが行われます。京都ではきっと酸化ストレス学についての活発な議論が繰り返されることと思います。私自身もまた国際学会で発表し、この場でご報告ができるよう、益々酸化ストレス研究を邁進していく所存です。

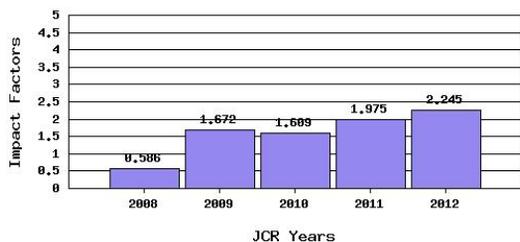


オンラインによる投稿随時受付中!
Online SubmissionのURL

<http://www.editorialmanager.com/jcbn/>

現在の Impact Factor : 2,245 (2012)

JOURNAL OF CLINICAL BIOCHEMISTRY AND NUTRITION



◆◆◆ SFRR ASIA News ◆◆◆

SFRR Asia オフィシャルジャーナル “Free Radical Research”

http://sfrj.umin.jp/asia/en_Official_Journal.htm

会員特別価格での定期購読の受付を行っています。

SFRR Japan (日本酸化ストレス学会)は、SFRR International並びに SFRR Asiaの下部組織です。日本酸化ストレス学会の会員の方は自動的に両国際組織のメンバーとなっております。

シリーズ:酸化ストレスのつぶやき 第5回



赤塚 慎也

名古屋大学大学院医学系研究科
病理病態学講座生体反応病理学

最近「糖質制限ダイエット」を試し始めた。ちなみに私の体型はBMIでは20を切るくらいで、体重だけでは非肥満と判定される。しかしその実体は、元来の運動嫌いのために筋肉量が極端に少なく、そのぶん内臓脂肪が蓄積した状態であり、体脂肪計で測ると「隠れ肥満」と表示される。最優先の課題はとにかく運動して筋肉を増やし代謝率を上げることと認識しつつ、今回突然にダイエットを気にしたのは、この秋に工学部学生向けの教養科目で栄養と病気について講義したことがきっかけである。生物学や医学になじみのない学生に興味を持ってもらえそうな話題として、食生活と肥満の関係についてしゃべったのだが、その下調べをしている段階で糖質制限の問題に突き当たってしまった。糖質制限ダイエットの理論では、人類が炭水化物によって活動エネルギーの大半をまかなうようになったのは農耕開始以降の比較的最近のことで、そのような食生活変化への進化的適応は未だ成されていないため、様々な健康上の問題が生じていると主張される。すなわち、有史以来、人類は炭水化物を食べ過ぎの状態が続いているという理解である。実際、食事に含まれる糖質の割合(熱量比)を40%以下に減らすと、とりあえず血糖値上昇が抑制されるという効果が得られる。短期的には、肥満、脂質異常症などの問題も改善する場合が多い。ある側面では酸化ストレスも軽減されているだろう。しかしそうは言っても、ここ数千年のあいだ人類が維持してきた生体エネルギー源の基本構成を一変させるのである。長期的にどんな影響が出るか分からないというのが慎重派の意見である。結局、糖質制限ダイエットの是非について私が科学的に判定できる状況ではないのだが、私自身の食生活において糖質を減らすべきかについては、不確定要素を含む世界においての選択の問題ということになる。糖質制限を推奨する論者の言説に当たって、個人的に最も腑に落ちたのは、「炭水化物の摂取は精神的な依存状態をつくる」という説明であった。そう、私自身、炭水化物中毒だったのである。私のこれまでの食生活はまさに「糖質漬け」という表現がふさわしく、特に穀物食に対しては相当の愛着を持っていた。私は過去にもタバコに強く依存している自分に気付いて、苦難の末に依存状態から脱却した経験があった。そのためだと思うが、今度は炭水化物に依存しているという自分の状態がはっきりと認められた。依存症とは心理学的には、手近な物質や行為によって脳の報酬系を刺激し自己効力感の不足を安易に補っている状態ということらしい。これからは研究活動により自己効力感が満たされるよう(安易ではない!)、日々さらに努力し、何にも依存せずに生きて行けるようになれたらと思う。

◆◆◆ 関連学会 開催案内◆◆◆

以下の関連学会情報は予定を多く含みます。変更などが生じる可能性もありますので、詳細については、各主催団体にお問い合わせ下さい。また、学会HPにても随時情報を掲載予定です。

Thirteenth Annual Meeting of the Society for Free Radical Research –India (SFRR-INDIA-14) Recent Trends in Free Radical and Antioxidant Research 会期: January 27-30, 2014 会場: Mumbai, India Further information email: sfrindia14@gmail.com

日本酸化ストレス学会 東海支部 第2回学術大会
日 時: 2014(平成26)年2月8日(土)13:30-17:30
会 場: 岐阜薬科大学本部学舎
(岐阜市大学西1-25-4)
実行委員長: 足立哲夫(岐阜薬科大学)
参加費: 一般1,000円、学生無料



Oxygen Club of California, World Congress 会期: May 7-10, 2014 会場: Davis, California, USA Further information: www.oxyclubcalifornia.org/occ/upcoming_meetings.php

Society for Free Radical Biology and Medicine 21st Annual Meeting

会期: November 19-23, 2014 会場: Seattle, Washington, USA Further information: www.sfrbm.org/sections/annual-meeting/information



第31回臨床フリーラジカル会議

会 期: 2014年12月5日(金)p.m.~6日(土)a.m.
会 場: 烟河(けぶりかわ) 会議室 (京都府亀岡市)
当番世話人: 吉川 敏一(京都府立医科大学学長)
問い合わせ先: e-mail: handao@koto.kpu-m.ac.jp
※一般の講演に加え、毎回好評であります若手によるセッションを含めプログラムを構成し、最新の知識を伝えると共に、参加者が同じ場所に宿して、昼夜を問わず交流を深める会となっております。是非ご参加下さい。



◆◆◆ 事務局より ◆◆◆

【会費納入のお願い】

日本酸化ストレス学会では、年度初め(毎年1月)に会費納入のご案内を差し上げております。

理事・評議員	12,000円/年	一般会員	7,000円/年
学生会員	2,000円/年	賛助会員	100,000円/年 一口

滞納が続きますと、退会処分となることがありますので、必ず会費を納めてくださいますようお願い申し上げます。

【会員情報 変更・追加等連絡のお願い】

会員情報変更などが行われていないのに、連絡先不明となることが多発しております。転居先不明などで連絡が取れない場合、学会情報などを送ることが出来ません。必ず、変更手続きを事務局宛ご連絡下さいませよう、重ねてお願い申し上げます。

♪♪♪♪♪
SFRR Newsletter 2014年1月号
発行: 2014年1月1日

SFRR Japan Newsletterに掲載を希望される方、あるいは、ご意見などありましたら、下記事務局宛ご連絡下さい。

SFRR Japan事務局 (総務委員会: 内藤裕二・半田 修)
〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路 梶井町465
京都府立医科大学大学院医学研究科消化器内科学内
TEL: 075-254-8520 FAX: 075-254-8521
E-mail: sfrj@koto.kpu-m.ac.jp
HP: <http://sfrj.umin.jp/index.htm>